愛知教育大学教職キャリアセンター紀要vol. 5 pp. 41 ～ 48, March, 2020

幼児の生活の中に見られる音楽との出会い

渡辺ユリナ＊　鈴木裕子＊＊

＊愛知教育大学大学院幼児教育領域
＊＊愛知教育大学幼児教育講座

Encounter of Children and Music in Their Life in Early Childhood

Yurina WATANABE＊　　Yuko SUZUKI＊＊

Graduate student,Aichi University of Education,Kariya 448-852,Japan
Department of Early Childhood Education Aichi University of Education,Kariya448-852,Japan

要　約

幼児と音楽をめぐる近年の研究動向を俯瞰すると「日常で音楽と出会っている子どもの姿」に着目する際の重要な観点である、環境、遊び、生活といったキーワードを含む研究が、幼児教育における音楽表現領域の中の新たな価値として注目されるようになってきている。しかし、幼児教育の現場において、「生活の中の音楽と子どもの関わり」の捉え方や指導法に対して保育者の困惑が見られたり、それらを音楽とみなすことに疑問を呈する意見があったりする。その大きな原因が「日常で音楽と出会っている子どもの姿」の実態がつかみにくいことである。そこで本研究では、幼児の生活の中において、幼児が音楽と出会っていると捉えられる場面を対象として、その場面でどのような音楽と出会っているのかを考察することを目的とした。研究の結果、日常生活における経験の中で幼児が音楽と出会う姿を大別すると、幼児が経験の中で音楽を「発見する」、その音楽を全身で「感受する」、感じたものを自分らしい方法で「表す」、の 3 つの姿に分けられた。さらに幼児は日常生活におけるあらゆる場面の中で、13 種類の音楽と出会っていることが読みとれた。本研究を通して、日々の子どもたちの生活における何気ない一瞬一瞬の中に、大人が認識する以上の「音楽と子どもの出会い」の存在が示唆された。

Keywords:　音楽、幼児、生活、事例研究

Ⅰ　問題と目的

幼児教育の現場では、子どもたちが歌を歌ったり、太鼓や鈴などの楽器を演奏したり、手遊びをしたりと、様々な音楽活動が取り入れられている。保育者はこれらの活動を通して、豊かに音楽と関わる子どもを育成すると同時に子どもの学びの手段として用いている。

このような状況に対して、今川[1]は、音を介した表現というと、音の出るモノを用意して何らかの活動をさせることを中心に考えがちであるが、目に見える形での活動以前ともいうべき大切な表現の基盤が、生活の中で、環境の中の様々なモノとの出会いを通して育まれているのではないだろうかと述べている。また河内[2]も、子どもの音楽活動といえば歌唱や合唱、手遊びなどを連想しやすいが、それらを本当の意味で楽しむためにも音楽活動以前に、音との大切な関わり（出会い）が多くあるのではないかと述べている。これらは「誰から見ても音楽をしている子どもの姿」だけでなく、「日常で音楽と出会っている子どもの姿」にも着目しようとしている。

幼児教育の現場における音楽活動の場面で多く見られるような姿は、一般的に音楽をしていると捉えられやすいのに対し、子どもたちの生活におけるふとした瞬間に生まれるような姿は、なかなか実態がつかめずに見落としてしまいやすい性質を持つ。そのため長年の間、いわゆる音楽活動についての研究が中心となっていた。しかし近年の、幼児と音楽をめぐる研究動向を俯瞰すると「日常で音楽と出会っている子どもの姿」に着目する際の重要な観点である、環境、遊び、生活といったキーワードを含む研究が、絶対量は少ないものの、新たな価値として注目されるようになってきていることが分かる。多くの研究者が閉じた音楽活動や指導の殻から抜け出し、子どもたちが生活の中で遊びという経験を通して、環境と相互作用しながら生きる文脈に目を向け始めたのであろう。

では、このような生活の中の音楽に研究者の関心が寄せられているのはなぜだろうか。その根拠となる「生活の中の音楽の価値」について今川[3]は、子どもたちが音を聴いたりつくったり、あるいは音について語ったり音を想起したり、音を伴う行為を繰り返したりしている中には多くの意味が含まれており、それが子どもたちの表現の育ちにおいて重要な位置をもつことが見えてくると述べている。子どもは、日常生活において、音との関わりを通して表現力や人間力などを養っていくのである。水野[4]も、幼児は他者と関わり、園庭の遊具や自然を媒介にして生活のあらゆる場面で表現を育んでいくとし、感性、表現の技術の獲得において欠かすことが出来ないと述べている。同時に、保育者はそのような姿を大切にし、発達に即した音楽の指導を行う必要があるとも述べている。その上で、幼児教育の現場において、音楽と子どもの関わりの捉え方や指導法に対して保育者の困惑が見られるとし、幼児期における音楽を介した豊かな学びを保証するための体制化の必要性を指摘している[5]。

このように保育者が、音楽と子どもの関わりをみとる際、何をもってそれらを「音楽」とみなすのかが大きく影響することが考えられる。それは、保育者の音楽観や保育観に大きく左右される。平松[6]は、自然の音や身近な生活の中で出る音、人工的に作り出した音、安らぎを感じる音、好きではない、または不快と感じる音など、身の周りにある様々な音の存在を明らかにした上で、そのような「音」が溢れていることを、園児たちが実感することが出発点であると述べている。実感した経験が十分にある幼児は、次段階として、その音を幼児自ら生み出し、メロディーやリズムの付いた「音楽」を自分なりに表現することが出来るようになっていくと述べ、「音」が「音楽」として意味付けられていく過程を示している。また、岡林[7]は、生活の中にみられる子どもの呼びかけや唱え言葉などを音楽とみなすことに疑問を呈する意見があることに対して疑念を述べている。「日常で音楽と出会っている子どもの姿」から音楽を捉えるのは容易ではなく、実態がつかめず見落としてしまいやすい。生活の中での子どもたちの呼びかけや唱え言葉などが音楽であることについては、それらの行為が起こった状況を詳細に捉えることによって明らかにされるのではないかと説いている。

そこで本研究では、幼児の生活の中において、幼児が音楽と出会っていると捉えられる場面を対象とし、その場面でどのような音楽と出会っているのかを考察する。日常生活における経験にこそ音楽が溢れていることを示すことによって、幼児教育における音楽表現領域の意義や可能性を検討する基礎資料とする。

なお「音」とは、自然の音、楽器の音、人の声、騒音、生活音など様々な種類があり、それらの音を構成するのは、高さ、大きさ（強さ）、音色の三要素である。そのバランス（混ざり具合）が時間とともに、どう変化したかによって、聴こえてくる音の性質（特性）が決まるとされている。それに対して「音楽」とは、一般的にメロディ（旋律）、ハーモニー（和声）、リズム（律動）の三要素をもつものとされている。それぞれの要素については、メロディは音の高さが、ハーモニーは複数の音の重なり合いが、リズムは音の高さ、音程に加えて音の強弱、音色などが、時間とともに変化し続けることにより作られる。また「音」は、無意識にも日常生活の中で絶えず耳にしており、即興的、非文脈的に存在するため、「音楽」に比して意識的に聴いたり奏でたりする機会が少ない。しかし、身近な「音」に耳を傾けることにより養われた感性は「音楽」を介した表現の豊かさへと繋がる。領域「表現」においても「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然のなかにある音形、色などに気づくようにする」という一文が見られることから、「音」を感受する力を育むことは重要視されるべきである。本研究では「音」と「音楽」を異なる意味を持つ用語として用いる。

Ⅱ　研究方法

対象：愛知教育大学附属幼稚園に在籍する幼児。

観察期間：2019 年 5 月 8 日－7 月 10 日、毎週 1 日、登園から降園まで、計 10 日観察した。

観察・分析の方法：

①子どもたちの日常生活における音楽との出会いの様子を観察し、フィールドノートによって記録をとる。

本研究では、日常生活の自然な文脈の中で幼児が音楽と出会う様子を見出すことを試みるため、観察場面や場所を限定しないように努めるとともに、子どもたちを取り巻く様々な環境や周囲の状況も含めてできる限り総合的に記述する姿勢をとることとした。

②全 82 事例の中から、子どもと音楽との関わりが顕著にみられる場面を選出し、逐語化する。

③豊かな音楽が溢れる日常生活における子どもたちの経験に焦点を当て事例を検討し、その場面で幼児が、どのような音楽と出会っているのかを考察する。

Ⅲ　事例と考察

本研究では、幼児の生活の中において幼児が音楽と出会っていると捉えられる場面を対象として、その場面でどのような音楽と出会っているのかを考察した。

子どもと音楽との関わりがみられる姿を事例として逐語化したものを、6 つの出会いの場面別に提示した。

また、「幼児が生活の中で音楽と出会っている」姿を発現させる要因が読みとれた部分（下線）を記している。通し番号（①、②…）は考察の際の該当部分である。

１．五感を使って音楽を見つける

＜事例の背景＞

子どもたちがプール遊びをする場面である。保育者は、タオルをマントのように見立てて子どもたち自身に持たせ、子どもたちを教室の外に移動させる。３歳児用の小さな園庭には、幼児が入ることのできるビニールプールが５つ設置してあり、それぞれ大きさは様々だ。プールの中には、色とりどりのボールやおもちゃが浮かべられている。プールサイドの机にも、バケツや釣りの道具などの水遊びの際に使うことのできるおもちゃが並べられている。子どもたちは、普段は園庭で目にすることのないプールやおもちゃを見て気分が高揚したのだろうか、声を出してはしゃいでいる。今にもプールに向かって駆け出していきそうな様子だ。保育者は、「そっと忍者さんになって、そーっとそーっと」と言いながら子どもたちを落ち着かせ、静かにゆっくりとプールサイドへ誘導した。保育者は子どもたちを２列に並べた後、「ぶらぶらぶらぶらぶらー」と言いながら手首や足首をほぐすための体操をさせる。足を消毒し、体に水をかけ終わった子どもたちは、プールの方に小走りで駆け寄り、各々の遊びを始めた。

＜事例１：水との触れ合いの中で見つけた音楽＞

（2019 年 6 月 19 日午前 9 時 30 分頃から 15 分間）

Ａ男は、プールのすぐ傍に設置してある机へ一直線に向かう。机の上には、水が流れると水車が回る仕組みのスライダーがある。Ａ男は、水の通り道のカーブしている部分を、親指と人差し指でつまむようにして触る。少しの間静止してスライダーをじっと見つめると、くるりと体の向きを変えて辺りを見渡しだす。Ａ男の近くには、他の子どもたちの遊んでいるプールと、おもちゃが並べられた別の机がある。Ａ男は別の机の前まで歩いていくと、様々なおもちゃの中から、迷うことなくボウルを手に取る。今度は、ボウルを持ってプールへと向かい、プール内に浮かぶ魚などのおもちゃが入らないように手で払いのけながら水のみをボウルに汲む。そしてその水の入ったボウルを両手で抱えて、慎重にスライダーの置いてある机へと戻ると、少々水をこぼしながらボウルを高く持ちあげ、スライダーの一番高いところから水を流し始める。ボウルからスライダーへと水の流れ出すところを、真剣なまなざしで見つめている。ボウル内の水を全て流し切ったところで、Ａ男はボウルを２、３度軽く振り水が無くなったのを確かめると、ボウルを持って急ぎ足でプールへと向かう。先ほどと同じように水のみをボウルに汲み、それを両手で持ちながらゆっくりとスライダーのある机へと戻る。再度、ボウルを高く持ちあげてスライダーの一番高いところから水を流し始めたが、少しだけ流すと動きを止め、スライダーの高いところから低いところへと流れていく水を目で追う。自然な水の流れにより水車は滑らかに回転する。スライダーで遊び始めた時から、Ａはずっと真剣なまなざしで水を運び、流し込んでいる。その最中の表情に変化は見られない。ボウルをスライダーの中間部に持ってくると、ちょうど水車の真上のところでボウルを傾けて直接水車に水をかけだす。水車は、自然な水の流れによりなめらかに回った時とは違い、水の勢いだけでぎこちなく回る。その様子を見た瞬間、ぱっと顔を上げた。そして目を大きく見開くと、近くでＡ男の様子を見守っていた保育者に満面の笑みを向けた。保育者が「Ａ男君、くるくる回ってすごいね。」と声をかけると、Ａ男はボウルをさらに傾けて全ての水を水車にかけきった。勢いよく流れだした水が水車の羽を跳ねてスライダーの脇に飛び散る。飛び散った水が自分の顔にかかりそうになったことで、Ａ男は一瞬目をつぶり身をのけぞらせたが、すぐにまた目を開けると机の上にできた水たまりを手の平全体で撫でてみる。今度は、軽く水面を叩きだす。すると手の平と水が重なることで音が生じることに気付いたＡ男は、何度も繰り返し水面を叩いていた①が、突然動きを止め、ボウルを手にプールの方へと走っていった。慣れた手つきでボウルに水を汲み入れ、両手でボウルを抱え、小走りでスライダーへと戻る。再度、Ａ男が中間部にある水車の真上から勢いよく水をかけると、先ほどと同様に、水が水車の羽を跳ねてスライダーの脇に飛び散る。ほとんどの水がスライダーをつたうことなく机の上にこぼれ落ちたため、水たまりはさらに範囲を広げ、最後には机から地面へと流れ落ちた。細く、真っすぐな線状で流れ地面に落ちる水の音が微かに聴こえる。Ａ男は地面へと流れる水を凝視し、やがて「びーち、びーーーちゅぶらぶらぴちゃっちゃちゃちゃちゃ」と言いながら、手首を上下に細かく振り動かして跳ねる②。大変嬉しそうな表情で飛び跳ねている最中も、地面へと流れる水からは目を離さない。その後何度も水を運び、スライダーに水をかけては飛び散る水や、机から流れ落ちる水を見て、触れて、聴くことを繰り返していた。

＜考察＞

①五感を働かせながら、手の平と水が重なって生じる音楽の不思議さに気づく

水との関わりを通して、Ａ男は様々なことを発見し心を動かされていた。遊びの最中、Ａ男の関心のほとんどは水に向けられており、自ら積極的に関わろうとする様子が見てとれた。大場[8]は、感性を働かせて受容する際に、五感をつかさどる感覚器官が非常に重要な働きをもつと述べている。見て、触って、試す中で、手の平と水が重なることで生じる音、つまり「身の周りの物との関わりから生まれた音楽」を発見したＡ男は、その音の不思議さを感じ何度も水面を叩いた。この時、手の平と水の重なる様子をじっくりと見て、水の感触を楽しむなどして、五感を充分に働かせて水との関わりを深めながら、音楽の不思議さに気づいていたと考える。

②机から地面へとこぼれ落ちて跳ねる水の音楽の面白さを、声を発しながら全身で表現する

Ａ男は地面へと流れる水を凝視した後、「びーち、びーーーちゅぶらぶらぴちゃっちゃちゃちゃちゃ」と言いながら、手首を上下に細かく振り動かして跳ねた。水の跳ねる様子を凝視する間、その際に発生する音にも耳を傾けていたと推察すれば、Ａ男が、視覚、聴覚から同時に得た情報を相互に結び付けながら、机から地面へとこぼれ落ちて跳ねる水の音楽の面白さを感じた結果、心中に留めておけない躍動感を、声を発しながら全身で表現するに至ったのだと考えられる。それこそが「感受したものから発せられた音楽」との出会いであったと捉えられた。また、このようにして視覚、聴覚から同時に得た情報を相互に結び付けながら面白さを感じたり表現したりしたのも、それまでの過程でＡ男が、五感を充分に働かせて水との関わりを深めていたことが大きく影響しているのではないだろうか。

２.ものを介して音楽を見つけ、音楽の変化によって見立て、つくりだす

＜事例の背景＞

４名の女児がアイスクリーム屋さんをして遊んでいた。Ｂ子は、アイスクリームを作っている途中で作業を中断し、周りを見渡し始めた。右手には、アイスクリ

ームのコーンに見立てていた乳酸菌飲料の容器を持っている。教室の端から端を一通り見渡すと、女児達が集まってアイスクリーム屋さんをしていた場所を離れ、一人で乳酸菌飲料の容器を用いて遊びだした。

＜事例２：乳酸菌飲料の容器から生まれた音楽を発見し、見立て、つくりだす＞

（2019 年 5 月 29 日午前 9 時 30 分頃から 10 分間）

Ｂ子が右手に持っていた乳酸菌飲料の容器を突然口元に当て、「ぼーー」と息を吐く①。続けて、間隔を空けながら「ぼーー」と息を吐く。数回それを繰り返しながら、Ｂ子は「ぼーー」という声の音程を段々と低くしていく②。最も低い音程に到達すると、低い音のまま 5 回ほど繰り返す。

乳酸菌飲料の容器に「ぼーー」と息を吹き込んで遊んでいたＢ子は、低くこもった感じの音の長さを「ぼー」「ぽっ」「ぼーーーー」と様々に変化させて近くに立っていた筆者に聴かせてくる②。様々な変化を試す度に筆者を見上げ、笑顔を見せた。

その後何度か繰り返して筆者に変化する音を聴せてきたところで、「ぼーー」と息を吹きかけていたのが「ぶっ」に変わり、息をただ吐くのではなく唇を振動させて音を出すようになる。Ｂ子は容器を口に当てながら何度も「ぶっ」と音を鳴らす。

それに対し筆者が「可愛い…ぶたさん？」と声をかけると「うん、赤ちゃんのぶたさん。」と答え、「ぶっぶっぶっぶっ」と鳴き真似をして見せる。その後突然Ｂ子が「ぶーー！」と大きく荒い音で鳴き真似をしたため、筆者が驚いた顔を見せると、Ｂ子は声を上げて笑い、「お父さん。お酒飲んでばっかだから、こんなん。」と言う③。筆者が少し離れたところへ移動した後も、しばらくの間一人で、「ぶーー！」と大きく荒い音を出してお父さんぶたの鳴き真似をしていた。Ｂ子は、その間も絶えず大声で笑い続けていた。

乳酸菌飲料の容器に息を吹き込んで遊んでいたＢ子が、手を叩いて笑ったため、容器が地面に落ちる。容器が地面を跳ねた時に偶然「カン！カカカカカ」という音がする。Ｂ子は一瞬静止し、音の鳴る容器に目を向けたがすぐに拾い上げ、容器をもう一度地面に落とす。容器はまた「カン！カカカカカ」という音を鳴らして床を跳ねる。その後Ａは乳酸菌飲料の容器を何度も地面に落とし再現して遊んでいた④。落としてすぐに容器を拾い上げたり、容器の動きが止まって音が完全に静止するまで容器を拾い上げなかったりした。

＜考察＞

①容器に息を吹き込むことで偶然に生まれた音楽の響きを、自ら繰り返し発して、聴き、味わう

Ｂ子が乳酸菌飲料の容器を初めて口に当てた時、Ｂ子は教室の窓の外の方を見つめていた。ただ一点を見つめ体を動かすことも声を発することもない様子からは、Ｂ子が何かを考えているようには見て取れなかったため、Ｂ子が初めに発した「ぼーー」という音は何らかの思いがあって生まれたものではないと察する。しかし、その後も繰り返し「ぼーー」という音を出す様子から、Ｂ子が乳酸菌飲料の容器に息を吹き込むことで「偶然に生まれた音楽」の響きを自ら繰り返し発して聴き、心地よさを味わっていることが分かる。

②音楽の変化の面白さに気付き、試行錯誤して楽しみ、他者に伝えようとする

偶然見つけた「ぼーー」という音の響きの心地よさに気付いたＢ子は、音程や音の長さを変化させながら自分なりの音楽を生み出し、筆者に向けて表現した。Ｂ子は積極的に様々な変化を試していたが、様々な変化を試す度に筆者を見上げ、笑顔を見せた。その様子からはＢ子が音楽の変化の面白さに気づき、試行錯誤して楽しみ、また「変化から発せられた音楽」を筆者に伝えようとしたことが窺える。

③ぶたの鳴き声の違いを、音楽によって見立てて表現する

「ぶっ」の音に対する筆者の「可愛い…ぶたさん？」という一言をきっかけに、Ｂ子は赤ちゃんのぶたさんや、お父さんのぶたさんの鳴き声を音楽で表現するようになる。赤ちゃんの鳴き声とお父さんの鳴き声とをはっきりと区別したことから、Ｂ子は赤ちゃんぶたとお父さんぶたがそれぞれに持つ鳴き声の特徴を想像した上で、それらを音楽によって表現したことが分かる。また、Ｂ子はお父さんぶたの鳴き声を何度も音楽にして表現した。初めは筆者の驚いた表情が見たくて大きく荒い音を出していた様子だったが、筆者が離れた後も同様にお父さんぶたの鳴き声を真似て笑っていたことから、Ｂ子が大きく荒い音そのもの、つまり「見立てから発せられた音楽」に面白さを感じていたと考える。

④試行錯誤して自ら音楽をつくりだす

容器を床に落としたことで偶然に生まれた「カン！カカカカカ」という音を耳にした後、Ｂ子は乳酸菌飲料の容器を何度も地面に落とし再現して遊んでいた。また落としてすぐに容器を拾い上げたり、容器の動きが止まって音が完全に静止するまで容器を拾い上げなかったりと、拾うタイミングの変化を様々に試していた。これらのことから、Ｂ子が、容器の床に落ちる音楽の不思議さを味わう過程において、容器が床に落ちて跳ねる時間の長短により変化する音楽の面白さに気付いたことで、試行錯誤しながら積極的に「変化から発せられた音楽」をつくりだそうとしていたことが分かる。

３．目に見えないものやその変化を音楽によってつくりだす

＜事例の背景＞

５歳児の保育室の近くに位置する砂場。男児５人が砂山を囲み、船の通り道である溝を手で押し固めたり、新たに通り道を作ったり、水を流し川をつくったりしていた。トンネルを掘った砂山からは、溝を掘ってつくった船の通り道が伸びていて、その通り道は砂山の周りを一周回ってトンネルへと続いている。ペットボトルと牛乳パックをテープで貼り合わせて組み立てた船がトンネルの中に置いてある。砂は水によって崩れてしまいやすい。そのため水を流し込んで川を作る際に、子どもたちは縦半分に割られた竹の端を溝に当て、もう一方の端から水を流すことで竹をつたって川へと流れる水の量を調節していた。子どもたち一人一人が熱心に、また作った砂山やトンネルを壊さないように気を付けて遊んでいた場面である。

＜事例３：川を進む船と、水しぶきの音楽＞

（2019 年 11 月 7 日午前 9 時 30 分頃から 15 分間）

Ｃ男は、「ピッピッピー、ピピッピピー」と言いながら、トンネルの中に置いてあった船を取り出す。

ペットボトルの口の部分を手前にして、船の通り道に沿わせるようにして船を動かす。「おふねっくーん、じゃぶーん、今日はいい天気だからねーどんどん進みますよーじゃぶじゃぶーん」①と言いながら、水の流れていない船の通り道を前進させていく。C男はその間も、その後も、頭を左右交互に傾けて体全身でリズムを取っていた②。一方、C男と同じく砂山を囲んで遊んでいたD男は、バケツに汲んだ水を、竹をつたわせて船の通り道に少しずつ流し込んで、川をつくろうとしている。その様子を見たC男は、「やったー、川に行けますねー！」と言うと、船を動かしていた手を止めてその場に船を置き、D男の下へと駆け寄る。C男はバケツを指さして「ちょっとそれ貸して」とD男に言った。D男がC男にバケツを手渡すと、C男は砂場の近くに水を張って置いてある大きな水槽から水を汲み入れる。そして川へと流れる水を調節するための竹の前に立ち、バケツを頭上に掲げると、「おい！危ないです！」と大きな声を張り上げる。砂場で遊んでいる子どもたちは一斉に動きを止めてC男を見る。C男は「じゃっぶーん！」と言いながらバケツの中の水を一気に流し込んだ③。そのため、竹をつたって少しずつ川へと流れていくはずの水は、ものすごい速さで川へと流れ出ていき、その多くが勢い余って竹からこぼれ落ちていた。C男は、自ら流した水の勢いの良さに一瞬驚いた様子を見せたが、すぐに笑顔になる。足早に水を汲んでくると、「じゃっっっぶーん」と言いながら一気に水を流し込む③。今度は、川の方向へバケツを押し出すようにして流し込んだため、水は竹を離れ宙を舞い、ほとんどが脇へこぼれ落ちていた。C男はその後も水を汲み、川に流し込む動作を繰り返す。「じゃっっっぼーん」や「じゃばーーーん」と音のみを変化させて２回繰り返した④後、これまでで最も大きな声で「どぅおーーーん！」と叫び、川に直接水をかけた⑤。船の通り道である溝を手で押し固めたり、新たに通り道を作ったりして遊んでいた他の子どもたちは、怒ったような声色で「ちょっとーもう」「壊れちゃうよ！」などとC男に言う。C男は空のバケツを片手に持ち数秒立ちすくんだ。何も言わず、そのまま後ろを向き返って再度水を汲んでくると、バケツを竹の端にしっかりと当てる。「ちょろーっと流しまーす。」と小さな声で言いながらゆっくりと水を流した⑤。

＜考察＞

①目に見えない水を音楽によってつくりだす

C男は「おふねっくーん、じゃぶーん、今日はいい天気だからねーどんどん進みますよーじゃぶじゃぶーん」と即興で作った歌を口ずさみながら船を前進させた。船の通り道には水は流れていなかったが、船を進ませるためには水が必要だ。そこでC男は見えない水を想像し、「じゃぶーん」という「見立てから発せられた音楽」により想像上の水を出現させたと考える。

②声に出さず心のなかで歌う音楽によって状況を継続させる

C男は即興で作った歌（①）を歌っている最中、頭を左右交互に傾けて体全身でリズムを取っていた。しかし、歌い終えたあとも同様に頭を左右交互に傾けて体全身でリズムを取り続けていたことから、声に出さなくともC男の心の中では歌が流れ続けていたと推察できる。またこの時、水の中を前進する船を、継続して想像していると考えられることから、心の中で歌った音楽は、「状況を継続させる音楽」であるといえる。

③動作に合わせて音楽のリズムを変化させる

C男は、「じゃっぶーん！」と言いながらバケツの中の水を一気に流し込んだ。勢いよく流し込むC男の動作に合わせて、水の勢いを感じさせる音「じゃっぶーん！」を発したのだと考えられる。さらに勢いよく流し込んだ際には、「じゃっっっぶーん！」とさらに溜めて音を発したことから、動作の勢いの度合いに合わせて音楽のリズムを変化させたことが分かる。このようにして、「動作と連動して発せられた音楽」により、連想される水の勢いの強さの違いを表していた。

④音楽の変化そのものを楽しむ

C男は、動作の変化に伴い音楽を変化させた③と異なり、動作はそのままに音楽のみを変化させた。曽田[9]は、幼児がしばしば歌の歌詞を誤認し、歌詞を変化させて歌うことに関して、幼児は言葉の意味よりも音そのものに焦点を当てた捉え方をしていると述べている。動作はそのままに音楽のみを変化させたC男も、音楽の変化によって水の勢いの度合いを表現することより、「変化から発せられた音楽」に焦点を当てていたことが窺える。

⑤周囲の反応に応じて発する音楽を変化させる

C男は水を汲み、川に流し込む動作を繰り返した後、終いには最も大きな声で「どぅおーーーん！」と叫び、川に直接水をかけた。しかし、その行為に対する仲間の反感を受けると、「ちょろーっと流しまーす。」と小さな声で言いながらゆっくりと水を流すように大きく態度を変えた。そして同時に、「他者の反応によって変化させられた音楽」を発した。このことから、C男が音楽の変化によって水の勢いの度合いを表現して楽しんだり（③）、音楽そのものの変化を楽しんだり（④）して自分の中で完結させる表現だけはなく、周囲の反応に応じて発する音楽を変化させたことが分かる。

４.状況の違いとそれを進める音楽の要素との出会い

＜事例の背景＞

子どもたちが次々と登園してくる朝、自由遊びの時間にE男とF男が汽車玩具で遊んでいる。E男とF男は共に 4 歳児である。教室では、子どもたちそれそれが様々な遊びを楽しんでいるが、汽車玩具で遊んでいるのはE男とF男のみである。二人は同じ遊びをしながらも、交わることなく遊んでいた。

＜事例４:「走る電車」を表現する音楽の変化と他者との関わり＞

（2019 年 5 月 19 日午前 9 時 10 分頃から 15 分間）

E男がおもちゃの電車をレールの上で走らせながら、「がたんごとーん、がたんごとーん」と言い出す①。音程はレの音を一定に保っている。電車の動きも、それほど速くはない速度を一定に保っている。また、E男の近くで同様に電車を走らせて遊んでいるF男は、自分の走らせている電車をじっと見つめて目を離さない。E男が「がたんごとーん」と言い出してから少し経った頃に、F男がE男の声に重ねるようにして「がたんごとーん、がたんごとーん」と言い出す②。その後も、二人は、言葉を交わすことなく一定の距離を保ちながら遊んでいた。

10 分ほど経ち、レールの上でおもちゃの電車を走らせていたE男は、「にゃーむにゃむにゃむ」と口に

する③ようになる。柔らかく、輪郭のはっきりとしないような発音の仕方だ。そして、電車の動きを徐々に減速させていき、右手で持って動かしていた車体をそっと横に倒し静止させる。E男は、横たわった電車を数秒見つめると、その電車をそのままに場所を離れ、他の電車を手に持ってレールの上を走らせ始めた。今度は「がたんごとーん」とも「にゃーむにゃむにゃむ」とも言わず、無言でレールの上を走らせる。速度は不規則で、少々荒く、勢いをもって電車を動かせていた④。

＜考察＞

①電車の走る様子を表すことのできる音楽を用いる

E男は、「がたんごとーん、がたんごとーん」と言い電車を前進させる際、発する音や動かす速度を一定に保った。おそらくE男は、生活経験により既に「走る電車」を具体的に想像することが可能であり、想像した「走る電車」の発する音楽を表現したと考える。この時、音速や電車を動かす速度を一定に保ったことで電車の走る様子がより現実味をもった。E男は、おもちゃの電車が走る遊びの世界の中で、実際に存在する「走る電車」の「想像を実現する音楽」を楽しんでいた。

②他者との関わりを築くきっかけとなる同じ音楽を取り入れる

F男はE男と同じおもちゃやレールを使い、場を共有して遊んでいた。そのため、遊ぶ様子を目にしたり言葉を交わしたりすることが可能な距離にいるにも関わらず、互いに相手を見ることも言葉を交わすこともなく一定の距離を保ちながら遊んでいた。そのような中でF男がE男の声に重ねるようにして「がたんごとーん、がたんごとーん」と言い出したのである。F男は、E男の発した「がたんごとーん、がたんごとーん」という音楽を、自らの遊びにそのまま取り入れた。その後も共に交わって遊ぶことはなかったが、「子ども間をつなげる音楽」がF男とE男の間に今後の関わりを築くきっかけをつくった。

③電車の気持ちを表現する発声による音楽を用いる

E男は、柔らかく輪郭のはっきりとしないような声で「にゃーむにゃむにゃむ」と言いながら、電車の動きを徐々に減速させていき、右手で持って動かしていた車体をそっと横に倒し静止させた。実際の電車は心を持つことも声を出すこともないが、E男は「にゃーむにゃむにゃむ」という言葉と音相をもって、電車の眠たい「気持ちを表す音楽」を発したのだと推察できる。

④無音のあらわしをする

E男は声を発しておらず、表面的には音楽を介した表現を行っていると捉えにくい。大場[10]は、表現と言う言葉には当てはまらない、実態が捉えられにくいものを「あらわし」としている。やる気がない、後ろ向きに思える行動や、何をしているのか分かりにくい行動なども子どもの一種の「あらわし」として大切に受け入れていくことの重要性を述べている。こうした視点で、音楽を介した表現を行っていると捉えにくいE男の姿を見つめ直すと、Eが①、③の時とは違い、速度を不規則に変化させ、少々荒く、勢いをもって電車を動かしていることから、「走る電車」に対する今までとは異なる思いを持ち、それを動作で、そしてあえて無音という手段をもって「音を発しない音楽」を生み出し、表したと考えられる。

5.ものの特徴の違いと音楽の要素の関連との出会い

＜事例の背景＞

自由遊びの時間。4 歳児のG子は筆者におままごとをしようと誘ってきた。G子はお母さんの役で、筆者は子どもの役をすることになる。

＜事例５：おーきくて、ちっちゃい、ながーくて、みじかい＞

（2019 年５月 15 日午前９時 20 分時頃から３分間）

G子はおもちゃのキッチンの前に立ち、筆者に「今から、夜ごはん作ってあげるからね。」と言うと、食器棚の中にある様々な形のおもちゃの食器を全て取り出し、床に広げる。G子はその中からボウルと、茶碗を手に取り、筆者を見る。ボウルと茶碗を交互に見ながら、「これはおーーきくて、これはちっちゃい。」と大きさの違いを説明する①。「ちっちゃい」は「おーーきくて」よりも短く、小さな音で言った。筆者が「そうなんだ。」と大きくうなずいて見せると、それらの食器をすぐに床に戻し、また新たにお皿と箸を手に取り、筆者を見る。そしてまた、交互に見ながら「これはまぁるくて、これはながーーいんだよ。」と形の違いを、口の開け方を変化させて音の高低で表そうとした①。

＜考察＞

①物の特徴を発声による音楽の変化によって表現する

おままごとを始めるにあたって、G子は筆者に役の設定やキッチンの機能などについて説明した。園における観察が初日であったこともあり、様々な物に見慣れない筆者の様子を感じ取ったのだろうか、G子は筆者に遊び方を詳しく説明しようとしていた。しかし、4 歳児が大きさや形などを比較しながら物の特徴を説明してみせるのは決して容易ではないだろう。また、「大きい」「小さい」「丸い」「長い」と言う言葉だけでは伝えきれない物の特徴がある。そこで、G子は自らの言葉による説明の不足を補うために、物の特徴を「言葉の代わりとなる音楽」の要素である音の長さや音量、音高の違いを用いて表現したと考えられる。

6.イメージの違いと音楽の要素の関連との出会い

＜事例の背景＞

多くの園児が、透明な袋の中で花びらと水を混ぜ合わせて作った色水を、ジュースに見立てて遊んでいた。H子は色水を透明な袋から紙コップへと移して、こぼれないように慎重に持ち歩いていた。

＜事例６：先生が飲んだお花のジュース＞

（2019 年６月５日午前 10 時頃から２分間）

H子が突然、「せーんせい！」と大きく明るい声で呼びかけ保育者の袖をひっぱる。保育者は腰をかがめて振り返り、「なーあに？」とスキップのようなリズムで、語尾を上げて優しく返事をする①。花びらを使ってジュースを作ったH子は、ジュースの入った紙コップを保育者の顔の前に突き出し、「見て！」と言う。保育者が「あら、おいしそう。ちょっと頂いてもいいかしら？」と聞くと、H子は「うん、どうぞ！」と言って両手で持った紙コップをゆっくり

と保育者に手渡す。保育者は両手で慎重に紙コップを受け取る。右手で持った紙コップの底に左手を添え、そのまま口元へ持ってくると、体全体を後ろに反ってジュースを飲む仕草をする。保育者は、「ちゅっ！ちゅーーー」と大げさな音をたてる。H子はその音を聴いて、おいしそうに飲む保育者の姿を見て、大変嬉しそうな表情を浮かべた。そして保育者がH子に向き直ると同時に、H子は保育者に「もっと、ちゅーってしていいよ！」と言う②。保育者は「ありがとう、じゃあもっと頂くわね。」と言い、「ちゅっちゅっじゅうーーー」と先ほどよりさらに大きな音を立てて飲む仕草をする。保育者が、「はーーおいしかった。H子ちゃん、おいしいジュースをありがとう。」と言うと、H子は満足そうに笑顔で頷く。そして再び紙コップを両手で持ち、その場を去った。

＜考察＞

①きっかけづくりに生かされる音楽を発する

「せーんせい！」というH子の呼びかけに対して、保育者が「なーあに？」と返答した。H子はとても大きく明るい声で呼びかけたが、そこには、花びらのジュースを保育者に見せ、何らかの前向きな反応を予想し期待する気持ちが表れている。また返答として保育者の発した言葉は、H子の呼びかけと異なっていたが、音楽のリズムや音高、音相は共通していた。岡林[11]は、このようなやりとりに「リズミカルな応答は様々な気持ちや情動を音楽にのせて発散させたり、開放的な気分を作り出したりする。」といった音楽の秩序の形成や、「保育者が子どもの気持ちを受け止め、子どもと同じ拍にのせて呼吸の長さをそろえて唱え返すことで共感している」といった音楽を介した情緒の現れが確認できることから、音楽を介した行為であるとみなしている。したがって、H子がこのような行為により気持ちを表現し、またそれが「他者間をつなげる音楽」として保育者に届けられたことで、H子と保育者が心を通わすきっかけとなったと考えられる。

②共通して認識する世界を生み出す音楽を楽しむ

保育者は大げさな音をたててジュースを飲む真似をしたが、H子はその音を聴き、おいしそうに飲む保育者の姿を見て嬉しそうな表情を浮かべた。この時、H子と保育者は花びらのジュースを実際に飲んでいるかのように思わせる「想像を実現する音楽」の響きを介して、「ジュースを飲む」ごっこ遊びに対する認識を共有していた。H子は、音楽が世界観の共有の媒体になっていることに無自覚的だが、保育者に対して「もっと、ちゅーってしていいよ！」と言った。したがって、音楽が世界観の共有に重要な役割を果たしており、H子は図らずも「他者間をつなげる音楽」を介して保育者と共に遊びの世界を楽しもうとしたことが分かる。

Ⅳ　総合考察

本研究では、幼児の生活の中において、幼児が音楽と出会っていると捉えられる場面を対象として、その場面でどのような音楽と出会っているのかを考察することを目的とし、観察事例をもとに考察した。その結果、幼児が生活の中で音楽と出会う姿と、そこで出会った音楽が以下のようにまとめられた。

1－①：水と触れ合う遊びの場面では、「五感を働かせながら、手の平と水が重なって生じる音楽の不思議さに気づく」姿が見られ、「身の周りの物との関わりから生まれた音楽」との出会いが読みとれた。

1－②：水と触れ合う遊びの中で音楽を生み出した場面では、「机から地面へとこぼれ落ちて跳ねる水の音楽の面白さを、声を発しながら全身で表現する」姿が見られ、「感受したものから発せられた音楽」との出会いが読みとれた。

2－①：乳酸菌飲料の容器を用いて響きを生み出せることに気付く場面では、「容器に息を吹き込むことで、偶然に生まれた音楽の響きを、自ら繰り返し発して聴き、味わう」姿が見られ、「偶然に生まれた音楽」との出会いが読みとれた。

2－②：「ぼーー」の音程や音の長さを変化させる場面では、「音楽の変化の面白さに気付き、試行錯誤して楽しみ、他者に伝えようとした」姿が見られ、「変化から発せられた音楽」との出会いが読みとれた。

2－③：乳酸菌飲料の容器を用いて発する音から想像を膨らませ、見立てて遊ぶ場面では、「ぶたの鳴き声の違いを、音楽によって見立てて表現する」姿が見られ、「見立てから発せられた音楽」との出会いが読みとれた。

2－④：容器を床に落として生まれた音楽の変化の面白さに気付く場面では、「試行錯誤して自ら音楽をつくりだす」姿が見られ、「変化から発せられた音楽」との出会いが読みとれた。

3－①：水を想像し、船を前進させる場面では、「目に見えない水を音楽によってつくりだす」姿が見られ、「見立てから発せられた音楽」との出会いが読みとれた。

3－②：心の中で歌う場面では、「声に出さず心の中で歌う音楽によって状況を継続させる」姿が見られ、「状況を継続させる音楽」との出会いが読みとれた。

3－③：川に水を流し込む動作と連動させて声を出す場面では、「動作に合わせて音楽のリズムを変化させる」姿が見られ、「動作と連動して発せられた音楽」との出会いが読みとれた。

3－④：川に水を流し込む動作はそのままに声だけを変化させた場面では、「音楽の変化そのものを楽しむ」姿が見られ、「変化から発せられた音楽」との出会いが読みとれた。

3－⑤：発した音楽に対する仲間の反感を受けた場面では、「周囲の反応に応じて発する音楽を変化させる」姿が見られ、「他者の反応によって変化させられた音楽」との出会いが読みとれた。

4－①：電車を走らせながら「がたんごとーん」と言う場面では、「電車の走る様子を表すことのできる音楽を用いる」姿が見られ、「想像を実現する音楽」との出会

いが読みとれた。

4－②：２人の幼児が共に「がたんごとーん」と言って電車を走らせる場面では、「他者との関わりを築くきっかけとなる同じ音楽を取り入れる」姿が見られ、「子ども間をつなげる音楽」との出会いが読みとれた。

4－③：「にゃーむにゃむにゃむ」と言って電車を動かす場面では、「電車の気持ちを表現する発生による音楽を用いる」姿が見られ、「気持ちを表す音楽」との出会いが読みとれた。

4－④：無言で電車を走らす場面では、「無音のあらわしをする」姿が見られ、「音を発しない音楽」との出会いが読みとれた。

5－①：おもちゃのキッチン用品について説明する場面では、「物の特徴を発声による音楽の変化よって表現する」姿が見られ、「言葉の代わりとなる音楽」との出会いが読みとれた。

6－①：子どもと保育者が応答唱をする場面では、「きっかけづくりに生かされる音楽を発する」姿が見られ、「他者間をつなげる音楽」との出会いが読みとれた。

6－②：保育者が花びらのジュースを音を立てて飲む場面では、「共通して認識する世界を生みだす音楽を楽しむ」姿が見られ、「想像を実現する音楽」「他者間をつなげる音楽」との出会いが読みとれた。

以上の結果から、日常生活における経験の中で幼児が音楽と出会う姿を大別すると、幼児が経験の中で音楽を「発見する」、その音楽を全身で「感受する」、感じたものを自分らしい方法で「表す」と３つの姿に分けられる。ただしこれらの姿は、連続して、もしくは同時に起こっている場合が多いことから、境界線が曖昧である。したがって、子どもの音楽との関わりにおいて、最も中心となる姿に着目して事例を分類する。

主に「発見する」姿に分類されるのは、1－①、2－①

主に「感受する」姿に分類されるのは、6－②

主に「表す」姿に分類されるのは、1－②、2－②、2－③、2－④、3－①、3－②、3－③、3－④、3－⑤、4－①、4－②、4－③、4－④、5－①、6－①

子どもたちは生活の中で音楽の存在に気付くところに始まり、その後音楽を楽しんだり味わったりすることを目的とすると同時に、感じたものを自分らしい方法で表す手段として用いている。年齢や状況の違い等によって結果は変化すると考えられるが、本研究の事例からは、感じたものを自分らしい方法で「表す」姿が最も多く確認できた。それは、発見した音楽から、その状況下においてそれぞれの子どもにとっての魅力を感受して、積極的に関わりながら「表す」というように、意図の有無にかかわらず自然な文脈の中で「表す」ことが子どもたちにとって意味をもつためだと考えた。

また、日常生活における経験の中で幼児が出会っている音楽として「身の周りの物との関わりから生まれた音楽」「感受したものから発せられた音楽」「偶然に生まれた音楽」「変化から発せられた音楽」「見立てから発せられた音楽」「状況を継続させる音楽」「動作と連動して発せられた音楽」「他者の反応によって変化させられた音楽」「想像を実現する音楽」「子ども間・他者間をつなげる音楽」「気持ちを表す音楽」「音を発しない音楽」「言葉の代わりとなる音楽」の 13 種類が確認できた。

しかし、このような音楽との出会いは、幼児が意図的に行っていない場合が多いため、見落せばその場限りで終わってしまうこともあるだろう。志村[12]は、音楽の聞こえ方について、聞こえてくる音の全てを音として認識する子どもに対して、大人は音を選択的に聞いていると述べている。本研究を通して、日々の子どもたちの生活における何気ない一瞬一瞬の中に、大人が認識する以上の「音楽と子どもの出会い」が存在している可能性を感じた。幼児が生活の中で音楽と出会う様子を、保育者はどの程度認識して日々の保育を行っているのか、または、認識した上でどのような音楽観、保育観をもって「豊か」だとみなしているのかを探ることを今後の課題としたい。

引用文献

1) 今川恭子（2006）表現を育む保育環境－音を介した表現の芽ばえの地図－.保育学研究,第 44 巻第 2 号, pp.60 - 70
2) 河内奈穂（2019）子どもと「音」との関係性について（Ⅰ）－子どもが「音」と出会う経験の意味－.松山東雲短期大学研究論集，第 50 号，pp.33 - 40
3) 前掲 1)，pp.60 - 70
4) 水野伸子（2011）幼児期における音楽理解の発達－「体制化」の過程－.岐阜女子大学紀要，第 40 号，pp.157 - 166
5) 前掲 4)，pp.157 - 166
6) 平松愛子（2017）子どもの音遊び－保育現場の音遊びを小学校音楽科の授業につなぐことを視野に入れて－.近畿大学九州短期大学，47 号，pp.34 - 48
7) 岡林典子（2003）生活の中の音楽的行為に関する一考察－応答唱《かーわってー・いいよー》の成立過程の縦断的視察から－.保育学研究,第 41 巻第 2 号, pp.50 - 57
8) 大場牧夫（1996）表現言論－幼児のあらわしと領域表現.萌文書林，pp.195
9) 曽田裕司（2016）保育の「表現」領域における幼児の「変化する音楽表現」への着目.尚絅大学研究紀要，第 48 号，pp.125 - 135
10) 前掲 8)，pp.25 - 27
11) 前掲 7)，pp.50 - 57
12) 志村洋子・小西行郎・今川恭子・坂井康子（2016）乳幼児の音楽表現.中央法規社，pp.16